

2014



平成 26 年 2 月 発行

No. 92

公益社団法人 日本山岳会秋田支部

秋田市千秋久保田町
2 番 23 号 佐々木方

TEL・FAX 018 (833) 2525

発行者 佐々木 民 秀

編集者 鈴 木 裕 子

伊藤 秀雄氏 追悼

伊藤秀雄さんを偲んで

佐々木 民 秀

常に控えめに、物静かな中に、突飛なユーモアを醸し出す伊藤秀雄さんが逝って早くも一年が過ぎ去った。

一昨年、傘寿を迎えた伊藤さんと歳祝いの約束をし、その連絡の最中に急逝を知らされたが、あまりにも突然の事にて愕然となったしまった。

伊藤さんとは同じ職場であったにも関わらず、部署違いで一度も顔を会わせる機会は無かったが、

平成七年、たまたま秋田・ソウル間チャーター便促進の一環として企画された韓国への登山を秋田魁新報社から依頼され、その一員として参加されたのが初対面であった。

伊藤さんは、退職後も元職場の有志登山が主体であったため、日本山岳会への入会

は意外に遅く、元同僚の鎌田倫夫さんの紹介で平成十四年に入会、既に古希を迎えようとしていた頃であった。

伊藤さんとの山行は十八年間ほどであったが、入会以後の山行は積極的で、年令を感じさせない行動力をもっており、いつも周囲の登山者を驚かせる存在でもあった。

特に、日本山岳会創立百周年記念事業の日本列島中央分水嶺踏査登山では、秋田支部担当区間の奥羽山脈へ積極的に参加され、その縦走した分水嶺



上の延べ距離数は、全国一四一六名参加者の内、第六位という記録をだしたことは特筆すべきことであろう。それも古希を迎えてのことであり、驚きでもあった。もし、五番森山頂で倒れていなかったら、おそらく第一位であったかもしれない。

また、分県登山ガイド「秋田県」の山六九座を早々に完登。さらに「岩手県」の山六四座を大方単独行で完登。さらには韓国、山々や県外の名山はもとより、県内の里山・藪山、2等三角点の山々へ、年を重ねるごとに積極的に登り、大いに登山の醍醐味を人一倍楽しんでいた。

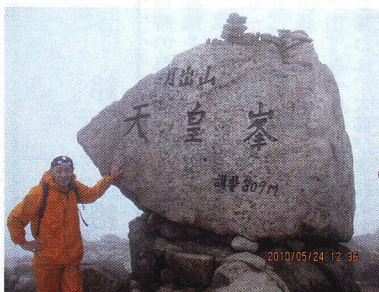
ただ、返す返すも残念な事は、伊藤さんが県内の一等三角点の内、唯一残されていた長場内山を、翌年に登る約束をしていたのが実現されずに逝ってしまったことである。

また、秋田支部の運営にあたっても、総務担当委員として事務局を心強く支えてくださり、特段のご協力を頂いてきたことは感謝にたえません。力強い協力者をまたしても失い残念でならない。いつも楽しいジョークで皆を笑わせ、常に周囲に気を配り、山行の度に持参する「蒸かしサツマイモ」は楽し

みの一つでもあった。

最後に、数多くの山行にご同行下さった事に感謝申し上げます、愛称・サツマイモの伊藤秀雄さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。(合掌)

写真右 分水嶺踏査
須川温泉から桑原岳への縦走途中のピラミッドP(一〇七〇m)山頂で蒸かしサツマイモを食べる。



平成 24 年 5 月 22 日
韓国・月出山での伊藤さん



平成 18 年 5 月 12 日
小生 伊藤さん

追悼

高橋忠雄

岳兄伊藤秀雄さんが急逝されました。平成二十四年十二月五日午後七時頃、佐々木支部長より伊藤さんが急逝され、自宅に安置されているとの連絡を受け、鈴木事務局長と三人で自宅を弔問しました。余りにも突然の訃報に接し、驚嘆した次第でした。

いつも温和で誠実な態度、そして勤勉家であり、良き岳兄でありました。山行計画も微に入り細に亘る計画を基に指導していただきました。

日頃から体調には充分配慮されておられたと感じておりましたが、残念でなりません。

伊藤さんは、秋田市役所を定年退職されてから、日本山岳会には平成十四年に入会、以降今日まで約十年間、短い期間でしたが濃密な山仲間としてご厚誼を賜りました。

伊藤さんは、日本山岳会創立百周年記念事業としての分水嶺調査・平成十五年から十八年まで行われた秋田支部担当区間には積極的に参加され、三十日間、二二・一kmを踏破されました。

十九年二月に行われた分水嶺フォーラムに参加したの寄稿文には「三年有余をかけた分水嶺調査で、藪漕ぎや苦勞して学んだ体験を基に、自然環境破壊の進んでいる昨今、自然の声に耳を傾けながらの山行でありたい。」と、自然破壊等に警鐘を鳴らしてくれたと考えっております。

今、思えば伊藤さんとの最後の海外

登山は、平成二十三年九月十日から十五日までの六日間、朝鮮半島最高峰・長白山（白頭山）でした。中国と北朝鮮の国境に鎮座しており、朝鮮民族は一生に一度は訪れたい聖地になっております。伊藤さんと小生は、雨のため登頂は断念しましたが、見事な長白瀑布や天池を見学、無事に帰国しました。



長白瀑布にて・左端が伊藤さん

忘れられない思い出の一つとして、平成二十四年八月二十二日の太平安登山があります。岳友の堀井弘さん、伊藤さん、小生は、旭又登山口で昼食後、奥岳を目指して出発。新築された奥宮参籠所に一泊。満天の星空と秋田市街地の夜景を楽しみながら、時間の過ぎるのも忘れ、杯を汲み交わしました。

翌日、一緒にご来光を仰ぎながら、

伊藤さんを想う

鈴木裕子

伊藤さんが突然逝ってしまつた。

平成二十四年は伊藤さんと高橋（忠）さんが傘寿、佐々木支部長が喜寿、そして私が古希であった。「本会の晩餐会が終わったら、歳祝いの人さ声かけて、みんなで忘年会やるべ」と話していたので、東京から帰った翌日（十二月三日）、何度も電話した留守だった。携帯電話も通じなかった。「また温泉に骨休めに行つたんだなあ」と思っていたが、さすが三日間も過ぎると心配になり、家族に連絡をとって亡くなったことを知り、茫然としてしまった。

伊藤さんと私は、部署は違っていたが同じ職場だったこともあり、何となく知っていたが、伊藤さんが退職後に秋田支部に入会（平成十四年）してから、「はしん山の会」や個人山行、支部山行等、一緒に登ることが多くなった。伊藤さんの頑張り、分水嶺調査で発揮された。県境までは遠く、三時、

四時の早朝出発。残雪期に長距離の主稜線をよく歩いたものだと思う。

私の目標としていた「東北百名山」に一緒に登っていた頃の平成十五年八月、福島県・帝釈山の山頂に着いた時、伊藤さんのザックから丸ごとのスイカが出てきて驚いた。他の登山者にも振る舞われ、大喜びされたこともあった。

平成十八年八月、飯豊山・大日岳では川入から入山し、三国小屋手前の剣ヶ峰の岩稜で突然豪雷雨に襲われ、必死で伏せ、全身びしょ濡れ、あまりの怖しさに「伊藤さん、ここで死んでも運命だな」と言ったら「まだ死んでらねがったなあ」と言い合っていた。

深田久弥の日本百名山にも一緒に登ってくれた。遠くは北海道の羅臼岳、斜里岳、雌阿寒岳、鳥取県の伯耆大山等。行程の長い高妻山や日光白根山、男体山、両神山等、伊藤さんの年代で頑張ったものだと思う。他の登山者は、伊藤さんの年齢を聞くと「年寄りの登る山ではない。大したものだ」と驚いていた。ついでに寄る観光地も、地元由緒ある里山も楽しかった。民宿で一箱の一杯も美味しかった。

伊藤さんの口癖は「こんな遠くいい山さ、こんなに登ると思っていなかった。連れてきてもらって有難がでなあ」、私は「ついて来てだけで有難がでなあ」と笑い合ったものだった。

暇人の伊藤さんと私、ベテランの

小生にとつて何年振りの奥岳小屋泊りだろうかと教えておりました。堀井弘さんの料理に舌鼓を打ち、朝食後下山し、無事に帰宅しました。伊藤さん、貴方との今までの事象が走馬燈の如く駆け巡っています。伊藤さん、これまでのご指導に改めてお礼申し上げますと共に、ご両親のおわします貴泉の国で、ゆつくりとお休みください。さようなら（合掌）



伊藤さん(左)と最後の山行となった
城ヶ森 (大館市・11月25日)

佐々木(民)さんの三人は「三馬鹿トリオ」と呼ばれていたが、「今度の天気の良い日イグド」「明日の何時集合」の突然山行を楽しみにしていた。

県内の藪漕ぎの2等三角点巡りは、急斜面ではロープを張って登り、地図と照らし合わせて方向を決め、目印のリボンを結び登る。あつちだ、こつちだ、と探して、地面を掘り起こして三角点を見つけた時の喜び。ついでに寄る県内各地元の里山太平山の祠探し、ダニの大鉢流山、蒸かしサツマイモ、時々ぶつくさ文句を垂れる私を「そういうもんでね」と諭してくれたこともあった。韓国の山々、中国・長白山、小笠原諸島と想い出は尽きない。残念なのは計画していた長場内山である。伊藤さんにとって県内最後の一等三角点の山であった。

大館市の城ヶ森、高森、長者山が、伊藤さんとの最後の山行になってしまった。あんなに元気で冗談を言っていた伊藤さんが、その僅か一週間後の十二月三日、「さようなら」も言わず突然消えてしまった。

太平山前岳二手ノ又 登山口にベンチを設置 堀井 弘

秋田支部では、公益的事業の一つとして、太平山歩道整備を行っている。本年度は、二手ノ又登山口にベンチを設置することになった。

この登山口に設置されていたベンチが年数を経て腐食し、使用不可。このコースを通るたびに気になっていたもので、設置することを支部に提案し、公益的事業として行うことになった。

さて、自分が作製することになり、方々のベンチを見たり、登山口までの搬送も考えて、木製で脚柱三本、下にブロックを取り付け、サイズは長さ二・五m、高さ〇・四m、巾〇・四mを二台とした。なにせ素人の私の作業であり、完成までに三日掛りであった。

十一月九日(土)、天候が心配であったが、二手ノ又登山口に参加者十一名が八時に集合。

安藤(金)委員をリーダーとする歩道刈り払い隊(六名)と、私がリーダーとなるベンチ設置隊(五名)の二組に別れ、作業を開始した。

作業中、登山者から「ご苦労さん、有難いなあ(有難いです)」と声をかけられハッスルする。

九時三十分、ベンチ設置を無事に終えて、刈り払い隊と合流するため前岳に向かう。

稜線のオオバクロモジ、ミズナラ、ブナの黄葉が実に綺麗である。

刈り払い隊の機械音がかすかに聞こ

えて来る。整備された後の歩道を登ってゆくの歩きやすく気持ちが良い。



設置したベンチの前で

前岳に到着したら刈り払い隊のリユクがデポされており、すでに中岳へ向かって進んでいた。

安藤(金)委員、佐藤博委員の機械操作はたいしたものである。

鈴木(裕)委員は前岳に残り、全員、十一時に中岳到着。天候も良好、刈り払いした高台からは、鶴ヶ岳、奥岳がすっきりと望まれる。

昼食は前岳ということであ前岳まで下山する。

前岳に着く頃、鈴木(裕)委員が大発見と叫んでいた。それは、平成二十一年に支部設立五十周年事業として前岳に設置したが、悪質な登山者により、抜き取られ、捨てられていた前岳の標柱であった。前岳山頂近くの藪の中で偶然に見つけたという。

ベンチ設置や標柱発見の話題で昼食は大いに盛り上がった。

三時、二手ノ又登山口着。設置したベンチに腰をかけたり、記念写真を撮ったりしてから解散となった。

太平山の人気スポットでもあるこのコースの登山者から、小休止に大変良いと言われ嬉しい。

参加者 佐々木民秀 今野昌雄

鈴木裕子 佐藤 博 高橋忠雄

石川祐子 柴田 勲 佐々木長秀

安藤金栄、熊谷光子

太平山県立自然公園管理員 畠山秀雄

鈴木裕子委員

「秋田県の2等三角点の山」と
「大館トレイルの山」を完登

鈴木裕子委員は、平成二十五年六月二十六日に湯沢市の兜山に登り、秋田県内の二万五千分の地図に記載のある2等三角点の山・一〇〇山(大山含む)を、また、大館市発行「大館トレイルの山」の鍋越山(大茂内)へ、同年四月二十一日に登り、同ブックの五十六山を完登した。(一等三角点二十四山は完登済)

支部事務局担当者会議報告 鈴木裕子

一月二十五日～二十六日開催
二十五日、市ヶ谷・本会会議室。

午後一時から午後五時まで。
高原理事の進行で始まり、森会長の挨拶は、会員の増強とリーダー育成のお願いであった。

会務報告に入り、黒川副会長から本会創立百周年記念事業についての案が示され、その内、支部参画事業は、支部企画海外登山の支援、二百名山ツアー、支部登山教室の支援、日本四千山登山体系の集約、グレートヒマラヤトレイル一七〇〇を分割して歩く等の案が説明された。記念式典は、平成二十七年十二月五日の予定。
・支部活性化事業の会員増の案として、年度途中の入会については、年会費の月割りを検討とのこと。支部活性化の知恵として、親子登山、安全登山の講習会、自然観察教室や森づくり運動等、公的機関等の助成制度を利用することや、地元有力企業とタイアップする方法があるとのことであった。

・家族登山普及WGからは、まもなくネット上に公開される。現在三十五山程度であるが、百山まで増やしたい。今後各支部に依頼する。
・三百名山については、八十六%が提出、三月末頃校正をお願いする。

・東京都山岳連盟を退会。日本山岳会が公益社団法人に移行したことによる社会状況の変化に伴い、都岳連を退会し、日本山岳協会・都岳連と新たな協力関係を構築してゆく。各支部が各県

岳連に加盟するかどうかは、支部の判断となる。

・今後の支部長、事務局会議は、九月二十日～二十一日に、支部長、事務局担当者の二名出席で行う。六月総会時の支部長会議は廃止する。

・各支部からの活動報告は北海道から岐阜支部まで。その後、懇親会。
二十六日、四谷・プラザエフ会議室。

午前九時から午後三時まで。
・各支部の活動報告。静岡支部から宮崎支部まで。

・二十六年度の事業計画や二十五年度決算については、本会・各支部ともその事務を経験しているため、例年よりも説明が簡素であった。

・十二月支部長会議の資料中、各支部からの要望についての回答があった。

秋田支部は、会費を減額し、本会と支部間の会計事務を無くしてほしいと要望していたが、公益法人として、本会と支部との連携決算となるので出来ないとのことであった。

・支部友の資格について各支部と意見交換がなされた。

・事務局からの連絡は、文書の報告メールアドレスの変更等。

・行事予定
東北・北海道地区集会 福島支部主管
七月六日(日)～七日(月)

全国支部懇談会 埼玉支部主管
十月十八(土)～十九日(日)

小島鳥水祭 本会主催 四国支部主管
四月十三日(日)

会務報告

◎役員会を開催

十二月十四日、午後一時から県民会館ジョイナス研修室で開催。

十二月七日に行われた支部長会議の報告や、二十五年度上半期の事業等の報告の後、二十六年度からの秋田支部の在り方として、支部組織や支部運営について話し合いを行なった。

公益法人化による本会からの指示・要望事項は、会員の増、支部の活性化、ルームの開設、森づくり、次期リーダーの育成、同好会の創設、山の日制定運動等があるが、今後も益々増加してゆくものと思われる。

支部でその全てを行うことは、人的・財政的に不可能な状況にあり、よって可能な事業のみを行う方が良いとの意見が大方であった。

また、「山の日協議会」への入会案内(年会費五千元・個人加入)も届いていて、支部会員に加入を勧めるよう依頼もあり、このような事業以外の要望も多々あるものと思われる。

支部設立五十五周年記念事業については、祝賀会や講演会、記念山行を検討し、支部内輪の会とすることとした。

また、会員からの事業提案(事業内容、実施要項添付)があれば役員会で協議し、総会で承認されれば提案会員を主管者として実施することも検討された。

二十六年度の役員改選等についても話し合いを行った。

役員改選は、本会に倣い、役員会で

決定し、総会で承認を頂くことになるとの事であった。

出席者 佐々木(民) 鈴木(要)

今野(昌) 鈴木(裕) 福田 柳田

堀井 鎌田 石川 柴田 三浦(眞)

安藤(金) 高橋(忠) 大山(健)

奥村清明会員

太平山系登頂四〇〇〇日達成

奥村会員は、平成二十六年一月六日、太平山系登頂四〇〇〇日を達成。今冬の太平山は凍風烈しく、毎回ランセルでした。思えば、只々、太平山に感謝。登山界の青春と並走出来た事を幸せだと思っているとのこと。

田口善信会員

梅池(長野県)から
日本海(富山県)へ

田口会員は、平成二十四年九月一日から六日まで、梅池～白馬大池～雪倉岳～朝日岳～梅海新道～親知を縦走。登山者が少なく、静かな山旅だったそうです。

会員の方で、其々目標の山行を達成された方は事務局にお知らせください。